

# 会報

第11号  
2010. 10. 15  
新潟大学  
理学部同窓会



## 新同窓会長挨拶

「行ってみようかな」と思う同窓会にしよう



理学部同窓会会長 野本 憲雄

口に出したからといって涼しくなるわけでもないのに、「暑い! 暑い!」を連発したくなるほどの夏でした。百

十三年ぶりの暑さだったとか、とにかく暑い夏でしたが、理学部同窓会員の皆様には、恙無くお過ごしのことと拝察申し上げます。

仕事の都合で、全学同窓会の集まりに参加することができず、その様子も未だお聞きしていませんので、全学同窓会の動き等の報告は後日にさせて頂くことをお赦し頂きたいと存じます。

新潟大学も法人化されて早七年度、第一期の中期計画が終わり、新しい中期計画がスタートしたことと思います。評価はどうだったのでしょうか、気になります。何はともあれ、修正すべきことがあれば修正し、母校がますます発展するよう願っています。

私が理学部で学ばせて頂いたのは、「高度成長」が声高に叫ばれ始めた頃、GDPが

四〇兆円にも届かない頃でした。あの頃のわが身をふりかえると、先行き不安に、何となくネクラに日々を過ごしていたように思います。小講義室に遅れて恐る恐る入ると、

先生が「僕は失望した!」などどただならぬ雰囲気。とにかく雷の被害にあわないように首をすくめていたのもつい

昨日のことのように感じます。しかし、学部の定員が今の半分にも満たないこともあって、先生方を大変身近に感じていました。先生方からはいろいろと親身のお世話を頂き今でも感謝しています。「あの時のあの先生のお話に乗っていたらどうなっていたかな?」などと、急に来し方を懐かしく思い起こすこともあります。

六月の理学部同窓会総会で頂いた「理学部は今」を、読ませて頂きました。大学生が同世代の56%にもなる今の学生さんは大学生活をどのように考えているのか、興味深く

読みました。「いろいろなことに積極的に取り組み、着実に進歩したい」、「(大学生活は)自分次第で無限にもゼロにもできる」、「もっと勉強してみたいと思うようになり、自分から積極的に学ぶようになった」などの頼もしい声が並んでいました。いい学生生活だね。いいね。充実した学生生活を送ってね、と思いました。

また、学部卒業生の進路報告も見ました。進学が62%もあり、良い時代になったと羨ましく思う、一方で、難儀をしている大学院修了者の姿を少なからず見えていますと、とにかく、モラトリアムな進学でなく、まっとうに実力をつけて、悔いを残さないよう、人生を切り拓いてもらいたいと思います。

若い人たちの考えも基本的にはそう変わってはいないと思います。同窓会が、単に過ぎ去った日々を懐かしむだけでなく、歳の差や学んだ時代を超えて、何かインセンティブを与えてくれるような、「行ってみようかな」と思う会にしたいものだなあと感じました。



## 辞めさせていただくにあたって思うこと



前会長  
中山 輝也

### 一、はじめに

この度、長い間務めさせていただきました全学同窓会理事、理学部同窓会長を退任させていただきます。新潟大学全学同窓会と、長い間、理学部同窓会の皆様にはお世話になりましたこと、ここに厚く御礼申し上げます。気付いたことを簡単にまとめてみました。理学部同窓会の皆さんにお読みいただければ幸いです。

### 二、理学部同窓会について

平成元年頃から各学科同窓会の先輩達を中心となり、二年以上を費やし統合するための話し合いがもたれました。理学部同窓会は平成三年十一月に、学科毎に結成し活動していた同窓会を統合して発足したものです。このことは新潟大学が独立行政法人となった現在を見越しての行動だったということが出来ましよう。

当初は連合組織のような形で発足し、化学科二回生の渡辺昌吾さんが会長に選ばれました。化学科のリーダー逢坂

勝也さんらが中心となって発展させていったのですが、それが軌道に乗り始めた矢先、数年間活動が休止状態になったこともありまして。改めて最初の結成時の各学科の先輩達再び動き出し、次は教職経験者でなく企業経験者から会長を出すことを決め、私に引受けるよう要請がありました。それから十年以上経過しましたが、各学科の垣根がなくなり、出身学科が異なっても同じ学び舎の友として「オレ、オマエ」の関係で付き合いが出来るようになった他は、これと言った業績もなく、馬齢を重ねるだけでは申し訳なく思い辞めさせていただきま

した。

この度、無理にお願いしてお引き受けいただいた野本憲雄会長は、教育界で輝かしい業績を残され、文字通り人格円満、博学多識な方です。今後の理学部同窓会の発展、さらには全学同窓会を真に尽力されるものと確信しております。どうぞよろしく申し上げます。

### 三、全学同窓会について

新潟大学が独立行政法人化するに伴い、それを支援するため、新潟大学全体の同

窓会の必要性から七年ほど前に各学部代表による準備会が設けられました。その後、新潟大学全学同窓会協議会として設立し、現在の新潟大学全学同窓会へと変りました。設立時は皆、真剣に協議し、会の充実そして大学の発展に夢を描いたものでした。各学部同窓会長を理事とした理事会、それを支える運営委員会が設けられました。その中で最近の理事会の雰囲気を含め綴ってみました。

全学同窓会も協議会時代を併せて前述のように七年目に入りました。皆が自由に発言し運営にあたっていた設立時に比べ、現在は八人の理事が協調して事に当たるといっても、一部の運営委員と役員により事前に根回しが行われ、これで全てが進んでいるように思われます。

例えば、わずか八名の理事の中に、副会長を三名に増やすという提案があり、それでも良いのですが、副会長は理事の互選となっているのが、すぐに候補者が読み上げられ、間髪を入れずに就任挨拶が行われました。済んだことは仕方ないとして、副会長は各学部出身理事の輪番制となるべきだと思います。一人は二年前、会長交代の際に一度辞任した

者が再度就任しました。多分かけがえのない方なのでしょう。三名に増員したなら、一名は医保、商短出身理事にも何らかの配慮をすべきと思います。

規約に特別顧問、相談役の条文を設けていますが、この会は設立十年にも満たないわずか六年の会です。財政基盤の確立も不十分、そして組織そのものが脆弱な中、二期会長を務めたことで、二年前の会長を相談役とするのはどうかと思います。この全学同窓会としてどうしても必要な人物であれば、その出身学部同窓会で会長を続けてもらい、全学同窓会のメンバーに加われれば良いのではないのでしょうか。

全学同窓会のカード事業で、法的な理屈は分かりませんが、法人税等が組み込まれており、委員の皆さんが血眼になって無報酬で活動しても、わずかな見かけ上の利益しかでない任意団体の同窓会に社会通念上、法人税は現時点でどうしても必要なのだろうかとも思っています。

二年程前、「新入生から一万円の任意寄附を各学部で行う」ことが決議されたにも関わらず、「平成十四年十月十四日の文科高第四五四号」を盾に、以前の「決議」を無き

ものにしたように思います。この通達は、常軌を超えた寄附の戒めのための次官通達で、当時、私大医歯学部の入学金、寄附金徴収は目に余るものがあつたから出たものです。このような文章で知らない者に不安感を与え、決議をうやむやにしようとするやり方は良くないと思います。どうしても反対なら、改めて理事会に提案し「決議」を無効にすれば良いのです。

私を感じるどころ、独立行政法人新潟大学を真剣に応援しようという気概を持ってやるべきで、独立法人化されても、研究と教育を両輪として学問を軸とする大学において、全学同窓会が財政基盤を強化して大学を支援出来るようにならねばならないのに、小手先の事だけに終始しているような気がしてなりません。

他大学出身の教職員が見たらこの全学同窓会がどう映るのでしょうか。愚痴のようなことを書きましたが、各学部同窓会とし、それぞれ異なる成立過程、規模、財務状況を尊重しつつ、全学を外し大きくくりで真の「新潟大学同窓会」とし、成就することを願うものです。

## 「若き人財」育成の 危機にあたって



理学部長  
谷本 盛光

減となり、日本の高等教育にとって致命症になる可能性がでてきました。

同窓会のみなさまには日ごろからご支援いただいで感謝申し上げます。学生の就職は厳しくなっておりますが、新潟大学理学部は、就職に強い大学としてマスコミでは全国トップレベルにランキングされるなど、不況の中、教職員尽力で健闘しております。これまで以上に、同窓会の力をお借りして、教育・研究のみならず就職にも強い「理学部」の姿を実現・アピールして行きたいと思っております。

今、新潟大学は第一期中期目標・中期計画期間を乗り切り、第二期中期目標・中期計画期間をスタートさせたところですが、しかしながら日本の大学は危機に直面しています。厳しい経済状況のなかで、国家予算の10%削減という政策が突如として登場してきました。文部科学省の予算も例外ではありません。五兆円にのぼる文科省予算の10%削減は五千億円の額に相当します。国立大学法人にそれがまとも

七月十日、全国三十二理学部長会議はすぐさま声明をだしました。わずか二日間で三十二名の学部長全員一致の声明をとりまとめることができたとほど深刻なものです。国立大学協会の試算では、大規模大学の二大学分、または、小規模大学の二十七大学分の運営交付金に相当する額の削減です。多くの大学が崩壊する恐れがあります。一律10%の削減では、新潟大学の学部あたり30%の削減、おそらく学科になると50%以上の予算削減となるでしょう。

二〇〇四年から二〇〇九年までの第一期中期目標・中期計画期間で、国立大学の運営交付金は八百三十億円が削減されました。この間、私たちは、さまざまな無駄を排除し、効率的な運営に向けた工夫を行い、教育と研究に大きな影響が出ないよう努力しました。しかしながら、さまざまなところに弊害が顕在化し、大学は疲弊しました。この上、10%削減が継続されるとすると、国立大学法人の崩壊につながることは目に見えています。特に理学の分野では、幅広い研究分野の中から、将来

花開く分野が育まれて来ており、運営費交付金の大幅削減は、直接、そのすべての芽を枯らしてしまふこととなります。若き人財を育てることができない国に将来はありません。若き人財こそが、「将来にわたって付加価値を創造し、持続可能な成長を担う」からです。このような危機にあつて、私たちの拠り所は社会からの大学への支持です。新潟大学の存在が社会から強く支持される必要があります。その支持を得るため、同窓会の支援が重要になってきています。今後、具体的なご支援をお願いするかと思っておりますので、よろしくお願いいたします。この時期に巡り合わせた学部長として、新潟大学理学部が崩壊せず、「若き人財」を社会に送り出し続けることができ

## 理学部 後援会より



後援会会長  
岩瀬 耕一

昨年度の卒業生の進路は、卒業生自身の頑張りや先生方のお骨折れもあり、ほぼ全員が大学院への進学や就職を決めることが出来たとお聞きし、私も良かったなと安堵しているところですが、景気が回復傾向にあるとの政府の見解が出されても新潟などの地方都市ではまだ実感がないように思

います。学生達には自分の目指すところに向かって頑張り続けて欲しいものです。さて同窓会の運営については個人情報保護法が壁になつて案内状の送付もままならず大変だと思っております。友達同士の声掛けなどで困難を乗り越えて欲しいものです。

新潟大学を卒業し東京や故郷に帰って就職された皆さんが同窓会に参加するのは大変だと思いますが、若いときに過ごした町をたまに訪ねて見るのも楽しいのではないかと思います。遠方からの参加も増えてますます発展することをお祈りしています。

## 全学同窓会のいけいけ

全学同窓会運営委員

清水 榮一

昨年度で新潟大学創立六十年記念事業も終了し、今年度は全学同窓会も通常の事業に戻りました。

▼新潟大学・全学同窓会記念講演会・交流会懇親会は平成二十二年十月二十三日(土)午後三時からANAクラウンプラザホテル新潟で開催されます。記念講演会は教育学部同窓会が担当し、講師には青柳正規氏(国立西洋美術館館長、東京大学名誉教授)、題目は「パックス・ロマーナとパックス・ニッポニカ」ローマの繁栄と日本の繁栄」の予定です。

懇親会・交流会は引き続き同ホテルで午後五時から開かれます。

▼新潟大学カードの会員数は平成二十二年六月末現在で本会会員二、八四七名、家族会員八三九名、計三、六八六名、学生シルバー会員一四二名で本人と学生会員合わせて二、九八九名となりました。

なお、提携カード会社の三



理学部棟正面

菱UFJニコス株式会社から会員のカード利用が伸長しておらず、新潟大学カード事業は大変厳しい状況であるとの申し入れをうけていることから、同窓会側からもカード利用促進策として本人会員あてお願いの文書が送付されました。

あわせて各学部同窓会にも色々な機会を捉えてカード利用のPRを進めるよう依頼されています。

▼全学同窓会のホームページに「新潟大学全学同窓会写真館」がアップされました。各学部同窓会の協力を得て公開されており、今後徐々に充実させる予定となっています。  
ホームページアドレスは<http://www.niigata-u-dousou.jp/shashinkan/>です。ぜひ一度ご覧ください。

▼五十嵐キャンパスの新しい正門が完成しました。これは大学側の事業ですが、正門の大学銘板は全学同窓会の寄贈によっています。予てから「大学と全学同窓会の共同事業の一つとしてシンボリックな「門」の設置が真剣に検討されていましたがそれが目に見える形となりました。(写真)」  
JR越後線新大前駅の方角



新しく建てられた銘板

▼全学同窓会の会議は新潟大学のサテライトキャンパス「とぎめごと」でしばしば開かれるようになりました。

場所は新潟駅の南に位置し、駅直結のPLAKA1の二階です。大小の講義室、会議室のほか、展示イベント等に利用できる多目的スペースがあります。大学関係者に限らずどなたでも利用できる案内されています。もちろん各学部同窓会・支部の会合にも便利な場所です。  
参考までに。



## 各学科の近況

### 数学科

学科長 齋藤 吉助

平成二十二年度も四月に一期がスタートしましたが、早いもので学生諸君は夏休みを迎えています。特に、四年生は、大学院進学、高校教員、公務員、就職など、各自の目標に向かって進んでいるようです。

平成二十二年四月十六日と十七日の二日間、今年も、新入生を対象に大学での勉学や生活についてのガイダンスや親睦を兼ねて合宿研修を行いました。場所は県立青少年研修センターで実施しました。教員による講義、懇親会、レクレーションなどを通して、交流や親睦を深めたようで、良き学友を得たように思います。五月十二日に数学科の卒業生を講師に迎えて、数学科講演会を行いました。教職希望の学生や公務員希望の学生に対して、貴重なアドバイスをいただき、教職や公務員を目指す学生にとって、非常に参考になったと思います。

六月二十三日は、学科持ち回りの「理学部コロキウム」があり今回の担当は数学科で、羽鳥理教授が講演致しました。

教員や院生、学生が羽鳥先生の最近の研究結果に触れることが出来たと思います。

八月八日、九日の二日間、オープンキャンパスが行われ、多くの高校生の参加がありました。数学科の学科説明会では、教員が数学の興味のある話題を選んで模擬授業を行いました。高校生が大学の数学に興味を持ったことと思います。また、八月十二日には、高大連携事業の一環として、新潟南高校の生徒を対象にしたSSHや、十一月に高校生を対象に数学トップセミナーを新潟県教育委員会の共催で計画しています。これにより、数学に更に興味を持つ高校生が増加し、数学科に入学する学生が増えることを期待しています。

数学科の人事異動は、平成二十二年三月三十一日付で高田敏江准教授が九州大学に異動しました。学科では唯一の女性教員であり、トポロジーの分野の教員が不在になりましたので、現在その後任人事を行っています。

数学科の現在の教員構成は、解析系に泉池敬司教授、齋藤吉助教授、羽鳥理教授、渡辺恵一教授、代数・幾何系に、吉原久夫教授、印南信宏教授、秋山茂樹准教授、情報系に、

磯貝英一教授、竹内照雄教授、田中環教授、山田修司准教授、蛭川潤一准教授の十二名になっています。現在の構成は、逆ピラミッドになっておりますが、平成二十五年三月に泉池教授、吉原教授、磯貝教授、平成二十六年三月に、竹内教授、平成二十七年三月に齋藤教授が定年退官予定です。数学科の雰囲気は五年後には大きく変わるものと思います。

### 物理学科

学科長 宮田 等

鈴木宜之教授が平成二十二年三月退職されました。平成二十二年四月現在、物理学科の教員数は十五名となり、自然科学研究所所属の教員と合わせて計二十二名になりました。

五月二十八日には物理学科恒例のケルビン祭が行われました。これは物理学科の一年生から自然科学研究所の物理学系大学院生、教職員など物理学科の関係者ならだれでも参加できる、年に一度の物理学科祭です。約百五十名の学生が参加し、大盛況でした。最近の学生は他者との交流が苦手であるという意見がありますが、学生のコミュニケーション能力を高めるためにも、このようなイベントは重要であると考えています。

五月二十六日から七月七日にかけて、新潟大学の駅南キャンパス「ときめいと」で、新潟大学公開講座「現代物理学への招待―ミクロとマクロの架け橋―」を物理学科の七名の教員が担当しました。これは一般社会人向けの講座で、高校生向けに行っている出張講義とは少し違った印象がありました。忙しい仕事の合間に物理学の話を聞きに来て下さった社会人の方々に対して、我々物理学科の教員もわかりやすい原稿を用意して講義を行いました。

高大連携講座が五月二十二日から十月二日にかけて行われています。これは今年度で四年目になるもので、新潟南高校の先生方の御協力の下に、主として新潟県内の高校生向けに行っている物理学講座です。新潟大学で行う実験講座もあり、参加した高校生が将来の進路を考える参考にして欲しいと願って行われています。

六月二十六日には理学部首都圏同窓会総会があり、他の二名の講師と共に物理学科長が講演を行いました。講演後の懇親会では、同窓会と理学部の各学科が、より密に交流すべきではないかという意見がでました。

七月十八日に日本物理教育

学会・新潟支部総会があり、物理学科の後藤輝孝教授が「低温物理とシリコン結晶原子空孔の観測」というタイトルで講演を行いました。主として新潟県内の高校の先生方が参加されており、新潟大学理学部物理学科と高校の物理教員との連携の重要性を認識しました。

七月から九月は高校訪問の時期です。今年は十一名の教員で手分けして新潟県内や近隣の高校を訪問し、新潟大学理学部物理学科の魅力を宣伝しています。来年もたくさん優秀な高校生が物理学科を目指して受験して下さいことを願っています。

## ■化学科

学科長 澤田 清

化学科の研究室と教員の近況についてご報告致します。理学部C棟の改修が終わり、理学部の全ての棟の改修が終了しました。これにより、化学科の研究室の配置がほぼ固まりました。学生実験室、化学科事務室等共通部分と、無機放射化学、生化学研究室は理学部棟に残りました。分析化学、有機化学系は自然科学研究所の物質生産棟に、また、物理化学系は主に情報理工棟に配置されています。特に、

理学部C棟は非常に明るくきれいに改修され、ここ数年理学部を訪れておられない方には全くの様変わりと感じられることと思います。このように、研究室が分散し幾分不便な部分も有りますが、教育研究には全く支障はなく、新装なった研究室また最新の機器の導入で教育・研究成果が挙がっています。また最近では化学科のコンパやパーティ、教職員の懇親会等へは殆どの学生、教職員が参加者するようになり、教員・学生間の交流も盛んになってきています。

現在の化学科は、HPに載せられているように、規程上では無機物質化学講座と有機物質化学講座に分類されていますが、実際の教育研究はほぼこれまでと同様な区分・分類で行われています。所属が自然科学研究科や機器分析センターの教員もあり、幾分複雑な事情は有りますが、現在の化学科の実質的な教職員は次の通りです。無機・分析系・澤田清教授、工藤久昭教授、佐藤敬一准教授、後藤真一准教授、物理化学系・徳江郁雄教授、島倉紀之教授、大鳥範和准教授、丸山健二准教授、生駒忠昭准教授、有機・生化学系・洞口高昭教授、長谷川英悦教授、岩本啓准教授、

田山英治准教授、堀米恒好教授、古川和広准教授、事務・技官系・長谷川和子さん、小高広太郎さん、永田聖美さん。この中でも澤田、徳江、島倉、洞口、堀米の各教授および長谷川さんはここ数年で定年となります。一方、生駒准教授は二〇〇七年に、また、岩本准教授は二〇〇九年に赴任され、化学科に新風を吹き込んで頂いております。このように、ここ数年で教職員が大きく入れ替わり、化学科の雰囲気も大きく変わるかと思えます。是非、近いうちに大学をご訪問頂き、改装、移転した研究室の見学、教職員との懇談をご計画頂ければと思います。

## ■生物学科

学科長 長束 俊治

一昨年度末の会報九号にて御報告いたしました以来、幾人かの教員の異動がございました。小谷昌司教授が二〇〇九年三月に、大西耕二教授が二〇一〇年三月に退職いたしました。共に長年に亘って、本学科の教育研究に携わって来た「名物」教員であり、思い出をお持ちの同窓生の方も多いのではないかと拝察いたします。また、臨海実験所の内田勝久助教が、二〇一〇年四月に宮崎大学農学部に准教授として栄転いたしました。去る人あれば、来る人もありで、二〇〇九年四月にはX線結晶解析学を専門とする伊東孝祐助教が、同年九月には私（長束）が生化学の教授として着任いたしました。また、所属は若手研究者研究推進室ですが、生物学科付きのテナトラック教員として、酒井達也准教授が二〇一〇年二月に着任いたしました。このテナトラック制度は、米国などでは既に確立された制度ですが、我国では新しい試みであり、まだ馴染みの無い方が多いかと存じますので、簡単にご紹介します。広く公募によって選ばれた若手研究者に自立した研究環境と資金



理学部棟の耐震工事終了（廊下）

を与え、自由な発想と若い活力で研究を強力に進めてもらうというものです。約五年の後に評価を行い、その結果、優秀と判断されれば、期限付きの雇用から、学科の定年制の職位に移されます。このような先進的な制度を、生物学科では、先駆けて採用いたしました。

次に学生さんの進路についてですが、学部卒業生の内70〜80%が生物学をさらに深く学ぶために大学院へ進学しています。学部卒業生や修士課程修了生は、食品、バイオ、医薬などから金融、サービス、流通などの幅広い業種に就職しています。一方、博士課程への進学者数は毎年数名程度ですが、博士号取得者の就職先を広げることなどにより、博士課程への進学者を増やすことが、生物学科が研究組織として生き残るための大きな課題となっています。

さて、私も教員の仕事として、教育と研究は勿論ですが、理学部の伝統を後の世代へと繋いでいく事もまた、大きな使命であると考えております。逆説的ではありますが、伝統の本質を守るためには、常に変化し続けることが必要です。さもなくば、変動する世の中に押し流されて消え

てしまいます。生物学は古くからある学問分野ですが、その中身は、もつとも前衛的でないければなりません。そのため私達は、様々なチャレンジを続けて行きたいと考えております。何卒、皆さまの御理解と御支援を宜しくお願い申し上げます。



理学部棟1階のサイエンスミュージアム室内

## 地質科学科

学科長 立石 雅昭

周藤賢治・田沢純一両先生ご退職

―地質科学科での出来事―

長い期間にわたって地質科学科の教育と研究に携わってこられた両先生が三月末を以ってご退職されました。二月十九日(金)午後、周藤賢治先生「二十九年の記録」、田沢純一先生「古生代ペルム紀

の海洋と生物、そして日本」と題する、お二方の最終講義が行われました。在校生はもちろん、卒業生もたくさん見られました。お二方も、ご退職後も、大学院生の研究指導で大学にお見えです。今後、さらに三年にわたって、お三方の先生方があいついで退職され、学科の教員構成も大きく変わります。

三月末には二年生が、小林健太・松岡篤志両先生の指導の下に、一週間、中国から四国にかけて地質見学(大巡検と呼ばれている必修の授業科目・野外実習Ⅲ)に向きましました。何事もなく皆、無事帰校されました。四月には新一年生が入学、大学院の方にも、修士・博士一年生が入学・進学されてこられました。それぞれ、これからの当教室の歴史を創造する立場で奮闘してくれるものと思います。

七月に行われた二件の国際交流を報告します。

台湾国立成功大学の理学部地球科学系の学生・院生が、二週間来学され、高澤栄一准教授の指導の下、学科の装置を用いて機器分析されたり、研究交流が行われました。十五日には博士課程三年生の Kei, Choon-Mun さんの「北

西中国の北部キリアン付加体における高圧低温エクロジヤイトの地球化学およびNMRの King-Ju. Hsu さんの「国立成功大学無機地球化学ラボにおけるレーザーICP-MS分析法の開発について」と題する研究紹介も行われました。

七月末には、ジャパン石油(株)(現 国際石油開発・帝石)の招聘でUAE大学およびアブダビ石油大学からの研修生一〇名が来濁・来学されました。栗田准教授が新津丘陵・三川揚川ダムの地質を案内するとともに、新濁堆積益と石油に関する講義を行なわれました。講義終了後、学生・院生の有志との懇談会も行われました。この研修はここ十年以上続いているものです。UAEでは現在、新しいクリーンエネルギー技術の集積・発信基地としての胎動も始まっております、今後の交流発展に期待が高まります。

また、七月には、昨年の韓国大巡検以来検討を重ねてきた韓国忠南大学と、本理学部・自然科学研究科との国際交流協定が締結されました。地質科学科も今後、アジア諸国を中心とした教育研究面での国際交流が一層進むものも期待されます。

## 自然環境科学科

学科長 湯川 靖彦

自然環境科学科は、一九九四年に一期生が入学し、新潟大学理学部の六番目の学科としてスタートしました。その年は「ドーハの悲劇」で惜しくも本大会出場を逃したW杯アメリカ大会の年です。その後、日本はフランス大会で初の本大会出場を果たし、日韓共同大会で初の予選突破、ドイツ大会では期待されながら惨敗、今年の南アフリカ大会では芳しくない前評判を覆して海外W杯で初のベスト16入りを果たし、世界的に注目されました。自然環境科学科も、発足以来、カリキュラムの改変や大学院改組、主専攻プログラムの導入などを経て、二〇〇九年度入学生から新体制がスタートし、時代のニーズに応えるべく改革を続けています。その間、二〇〇六年三月に石田昭男先生が定年でご退職されて以来毎年学科創設にご尽力された先生方がご退職され、本年三月に樫田昭次先生ご退職後は、一期生の入学を知る教員が学科全体の四分の一となり、教員組織の面からも「歴史を刻んだ」新しい学科となりました。

新生自然環境科学科では、地球科学系と生物科学系を二

つの柱として、化学と物理学の分野が緩やかにこれらを統合させるといふ将来構想のもとで教育研究を進めております。この将来構想に則り、多様で複雑な自然現象のメカニズムを正しく理解するための基礎学力を身につけ、地球規模での様々な問題に取り組みことのできる広い応用力・問題解決能力を備えた人材の育成を目指しています。その実現に向けて、自然環境と人間の好ましい共存関係を探求することを目的とする教育プログラムを用意し、物理学、化学、生物学、地学の基礎学力を身につけ、自然現象を多角的な視点から総合的に理解する能力を培うべく教育を行っています。

また、本学科では学科開設当初から学生の自主的活動を重んじ、学生の自主ゼミを支援してきましたが、これらが学科の良き伝統として定着して参りました。各自主ゼミが自然環境科学科同窓会（創環会）あるいは学科に予算を申請し、活動報告を提出するという活動形態が整い、理学部の特色ある教育として全学的に注目されています。

当然のことながら本学科同窓会の創環会も理学部で最も歴史の浅い同窓会ですが、上

述の学生支援を含め、定例の活動・事業は活発で、理学部を代表する同窓会と申し上げても過言ではないでしょう。

自然環境科学科が若い学科にも拘らず、学科・同窓会共に歴史ある他学科に伍して発展して参りましたのも、在学生・同窓生の弛まぬ努力の賜物と感謝致しております。

## 理学部首都圏同窓会だより

理学部首都圏同窓会

会長 高橋 哲夫

毎年開催の理学部首都圏同窓会は懇親会に先立ちサイエンスセミナーを行っています。今年には新潟大学から宮田等教授（物理学科）、酒泉満教授（自然環境科学科）、島津光夫名誉教授（地質科学科）をお招きし、それぞれ「万物を作る最小粒子と宇宙の始まり」「メダカに学ぶ『オスとメスの作り方』」「理学部いま、むかし」と題した講演をして頂きました。

宮田・酒泉両先生からはご専門の先端領域について分かり易い解説を、島津先生からは大学院創設の経緯をお話し頂きました。

懇親会では新潟大学のお酒を取り寄せ、おいしい料理とともに短い時間ではありましたが、学科や年齢の垣根を超えて、和気あいあいとした雰囲気で行われました。幹事役としてはほっとしているところです。

昨年の参加者は約四十名、今年には大学の先生の教え子の参加があり、約五十名と若干増えております。しかし、毎年、どうすれば多くの同窓生の皆さんに、同窓会に参加して頂けるかに腐心しております。このことについて幹事会で話題にしていることをベラスに紹介させて頂きます。

今年まで、同窓会案内状を送付先名簿はあまり更新されず、そのためか年々参加者が減少傾向にありました。学部・大学院の卒業・修了生が数多く首都圏に来ているはずですが、なかなか名簿に反映されることはありませんでした。理学部同窓会のご尽力により、この十二月には同窓会名簿が発行されることになり、来年はこの名簿を使わせていただくとうと期待しております。

二つ目は、同窓会は楽しくなければなりません、サイエンスセミナーは参加者の興味を満たす役割を果たしているようです。懇親会において講師の皆さんと話を咲かせるきっかけにもなっています。三つ目は、多くの同窓生の

皆さんにどうすれば「参加したい！」という気持ちになってもらえるかです。ここが一番難しいところで、誰も知った顔がないと「気後れしてしまう」となります。改善のアイディアの一つが恩師と教え子の絆を深める場として同窓会を活用する、今年には囃らずもこれできていたようです。

来年はさらに工夫して同窓会を一つのコミュニティとしてしっかりしたものにして行きたいと考えています。左はセミナー参加者全員の写真です。



## 支部だより

◆数学科支部

支部長 樋浦 卓嘉

平成二十二年度は四月から六月中旬にかけ、役員会、代議員会、支部総会を開催しました。役員若返りを図ろうという役員改選が大きな議題でしたが、大きく若返ることはできず、樋浦卓嘉（第十二回卒）が支部長の任にあたることになりました。なお、理学部同窓会の数学科支部からの幹事として、あらたに武石文雄（第二十回卒）が加わります。その他、代議員などの役員にも比較的若い世代からも入ってもらいました。大澤前支部長には十年間、数学科同窓会長、理学部同窓会数学科支部長として尽力いただきました。組織の改変などの難しい局面をよく乗り切って、数学科支部の基盤を作られました。支部会員一同、謝意を表するものです。

比較的若い世代の支部活動参加をいかにして実現していくか、さらには理学部をどのように応援していくかという課題解決に向け、今後とも取り組んでいきたいと考えています。

### ◆物理学科支部

支部長 丸山 敬

#### 物理学科支部の新体制について

野本新同窓会長を載いて、例年になく厳しい残暑が続いておりますが会員の皆様ますますご壮健のこととお慶び申し上げます。ご案内のとおり、「全学同窓会」設立に大変ご苦労されました中山会長の後任として、物理学科同窓の野本憲雄氏が平成二十二年度理学部同窓会総会において新会長に推挙され承認されました。法人化の流れは理学部のような基礎科学研究分野にとりましては厳しいものがあります。お聞きしますと物理学科も学部生、三年次編入生と多様化され、学部卒は大部分が大学院自然科学研究科の前期課程に進学され学際的になっております。また、昨今の厳しい経済状況から大学卒の就職率も六〇・八%と超氷河期が続いております。それだけに期待される同窓会の役割や在り方が問われています。新たな舵取りをされる野本新会長をお迎えし、物理学科支部の役割が一段と重くなりました。近々支部の集まりをもち、会長を支える新しい体制を整えたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

### ◆化学科支部

支部長 畠野 弘通

新潟大学の化学系の先生方と県内の高校化学の教員とで「新潟県化学教育協議会」を組織し、昭和六十三年から化学への啓発活動が続けています。初期には講演会や高校教員向けの実験講座でしたが、平成三年頃からは高校生向けの「化学実験公開講座」へと発展し、毎年五十名から八十名位の高校生が講座に参加しています。今年は公開講座の二十回目を記念し、長年ご尽力いただいた方々で懇親会も開催しました。母校の先生方のご指導をいただき、実験公開講座、出前実験講座の一層の発展に、今後とも支部の幹事の方々とともに協力して参りたいと考えています。

### ◆生物学科支部

支部長 荒木 勉

ここ数年、大きな行事等のない年には生物学科としての目立った活動が無く、大いに反省しています。

三月以降の活動としては、三月期卒業生を同窓会名簿に加えるために情報収集を行ったこと、さらに「理学部同窓会名簿作成事業」に向けて生物学科の名簿の整理と調査を行ったことが主な仕事でした。なお、昨年度から、会誌発送業務を事務局で行っていたべくようになり、大幅に業務が軽減され感謝しております。

### ◆地質科学科支部

支部長 田澤 純一

支部総会が六月十三日(日)ホテル日航新潟「孔雀の間」で開催され、役員改選、平成二十一年度事業・決算報告、平成二十二年事業計画・予算等が審議されました。新役員は支部長(田澤純一)、副支部長(神田章、佐藤茂昭)、幹事長(田村伸夫)、副幹事長(「庶務」豊島剛志、「事業」鴨位幸彦、「首都圏」平井明夫、「幹事」(「庶務」石橋輝樹、「事業」高野正樹、関谷一義、馬場幹雄、佐藤寿則、落合厚(会計) 豊島剛志)、「監事(若林茂敬、志村俊昭)の十六名



オープンキャンパス風景

### ◆自然環境科学科支部

支部長 尾原 祥弘

今年は十月九日(土)に、新潟大学を会場として総会・講演会・懇親会を行いました。今年には記念すべき第十回目であつたため、特別企画として講演会を三部構成としました。一部はパネルディスカッションで、一期生から十三期生までそれぞれの年代から一人ずつ代表者が集まりました。思い出の講義について、よく行った大学周辺のお店について等々、自然環境科学科での学生生活に関する話で盛り上がりました。二部は石田昭男・増田芳男先生の対談です。学生時代を思い出す、難しくも懐かしい話を聞くことができました。三部は学生の諸活動というテーマで、学生が自立的に集まって行ってきた環境に関する学習について振り返りました。現役の学生が先輩はどんなことをしていたのか知りたいということ企画しました。一期生が卒業して十三年が経ちますが、自然環境科学科のあゆみや、学生時代のことを楽しく振り返ることができた第十回目の行事となりました。



別表1

## 平成21年度 理学部同窓会決算

## 一般会計

収入の部	費目	予算額(円)	決算額(円)	増減	説明
	入会金・終身会費	4,400,000	4,720,000	320,000	0
繰越金	432,088	432,088	0	0	
雑収入	12,912	9,978	-2,934	0	預金利息
合計	4,845,000	5,162,066	317,066	0	
支出の部	会議費	200,000	193,300	-6,700	諸会議交通費 延べ72名、会場費他
	広報費	300,000	454,630	154,630	理学部同窓会紙「会報10号」(5000部)印刷代
	理学部事業共済費等	1,000,000	350,000	-50,000	学生用ロビーのパーティション、抗議室用プロジェクター
	名簿編集費	100,000	18,200	-81,800	送料、編集委員会交通費補助
	負担金等	455,000	454,000	-1,000	全学同窓会賦課金
	支部交付金	1,120,000	1,120,000	0	160,000*7支部
	事務費・通信費	800,000	522,849	-277,151	光熱水費、コピー、郵送料、払込手数料、印刷代、消耗品、事務局費等
	人件費	200,000	192,000	-8,000	後援会パート手当
	予備費	170,000	0	-170,000	
	小計	4,345,000	3,644,109	-700,891	
	積立準備金	500,000	1,000,000	-500,000	特別会計へ繰り入れ
繰越金	0	517,957	517,957	郵便局21,832+第四425,718+現金62,107+振替口座8,300=517,957	
合計	4,845,000	5,162,066	317,066		

## 特別会計

特別会計	費目	収入	支出	残金	説明
特別会計	前年度からの繰越金	6,000,000	0	6,000,000	定期預金(利息は一般会計に組み入れ)
	21年度積立金	1,000,000	0	1,000,000	定期預金(利息は一般会計に組み入れ)
	計	7,000,000	0	7,000,000	次年度へ繰越

別表2

## 平成22年度 理学部同窓会予算

## 一般会計

収入の部	費目	予算額(円)	前年度予算額	増減	説明
	入会金・終身会費	4,400,000	4,400,000	0	0
繰越金	517,957	432,088	85,869	0	現金(21,832)+第四(425,718)+郵便局(62,107)+振替口座(8,300)
雑収入	12,043	12,912	-869	0	利子、その他
合計	4,930,000	4,845,000	85,000	0	
支出の部	会議費	200,000	200,000	0	諸会議交通費補助他
	広報費	200,000	300,000	-100,000	理学部同窓会紙「会誌11号」印刷、ホームページ運営費等
	理学部支援事業費	500,000	1,000,000	-500,000	理学部からの要請による支援事業
	名簿編集費	100,000	100,000	0	理学部同窓会名簿編集
	負担金等	455,000	455,000	0	全学同窓会賦課金、分担金
	支部交付金	1,120,000	1,120,000	0	各支部160,000*7
	事務費・通信費	400,000	800,000	-400,000	光熱水費、コピー、郵送料、払込手数料、印刷代、消耗品費、事務局費
	会員宛郵送費	600,000	0	600,000	会員宛会報などの送料
	人件費	200,000	200,000	0	後援会パート手当
	予備費	155,000	170,000	-15,000	
	小計	3,930,000	4,345,000	-415,000	
積立金準備金	1,000,000	500,000	500,000	特別会計へ繰り入れ	
合計	4,930,000	4,845,000	85,000		

## 特別会計

特別会計	費目	収入	支出	残金	説明
特別会計	21年度までの繰越金	7,000,000	0	7,000,000	定期預金(利息は一般会計に組み入れ)
	21年度積立金	1,000,000	0	1,000,000	定期預金(利息は一般会計に組み入れ)
	計	8,000,000	0	8,000,000	

## 2010理学部同窓会役員名簿

別表3

会長	野本憲雄(物理学科)	幹事	本間悟(化学科)
副会長	樋浦卓嘉(数学科)	幹事	田辺薫(化学科)
副会長	丸山敬(物理学科)	幹事	清水榮一(生物学科)
副会長	畠野弘通(化学科)	幹事	長谷川博(生物学科)
副会長	荒木勉(生物学科)	幹事	堀昌明(生物学科)
副会長	田澤純一(地質科学科)	幹事	神田章(地質科学科)
副会長	尾原祥弘(自然環境科学科)	幹事	田村伸夫(地質科学科)
副会長	高橋哲夫(首都圏)	幹事	渡部直喜(地質科学科)
幹事	渡部直喜(地質科学科)	幹事	鈴木剛(自然環境科学科)
幹事	樋浦卓嘉(数学科)	幹事	加藤直之(自然環境科学科)
幹事	武石文雄(数学科)	幹事	桜井寿之(自然環境科学科)
幹事	竹内照雄(数学科)	幹事	佐藤茂司(首都圏)
幹事	丸山敬(物理学科)	幹事	後藤直樹(首都圏)
幹事	本間正宜(物理学科)	幹事	平井明夫(首都圏)
幹事	土屋良海(物理学科)	監事	佐藤敬一(化学科)
幹事	工藤久昭(化学科)	監事	志村俊昭(地質科学科)

# 事務局より

一、理学部同窓会「総会」開催  
平成二十二年六月十三日(日)ホテル日航新潟において下條学長、谷本理学部長、各学科長、後援会長のご臨席のもと、総会が開催され次の事項が承認された。

総会終了後、懇親会が同ホテルにて盛大に行われた。

☆事業と会計

- (一)平成二十一年度事業報告
- (二)平成二十一年度決算報告
- (三)平成二十一年度会計監査報告
- (四)平成二十二年事業計画
- (五)平成二十二年予算

☆役員(同窓会長、副会長)改選  
(一)新同窓会長に野本憲雄(物理、十三回卒)を選出、承認される。

(二)新副会長に樋浦卓嘉(数学、十二回卒)、新監事に佐藤敬一、志村俊昭が会長より委嘱される。

(三)幹事数名が交代した。

二、同窓会名簿について  
理学部同窓会「会員名簿」が十二月末に刊行されます。ご予約された皆様へは年末～年始にお届けすることに努めております。

初めての記念すべき名簿となりますが、ご批判、ご要望等をいただき、今後に生か

たいと思います。  
ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

三、理学部からの要請にもとづく支援

- ・講義室用プロジェクターを最新機種に更新した(平成二十二年二月)(後援会と共同)

四、全学同窓会との連携について

- ・賦課金・分担金を応分負担し、財政的に貢献した
- ・理事会、運営委員会に参加し、運営に貢献した
- ・行事、広報活動、大学カード事業への協力

五、会費の徴収について

- ・後援会と連携し、平成二十二年新入生より会費を徴収した。
- ・正会員に対する寄付依頼は継続中

六、その他

- (一)平成二十一年度決算書・平成二十二年予算書 (別表1、2)
- (二)平成二十二年役員名簿 (別表3)

(三)会報十号が数学科支部の担当で発行された(十二月十五日)。会報十一号は自然環境科学科支部が編集を担当し、十月中旬発行予定



理学部同窓会「総会」風景

## 退職された先生

(平成二十一年度)  
周藤 賢治先生(地質科学科)  
在職期間 昭和五十六年から平成二十二年三月  
専門分野 岩石学

鈴木 宜之先生(物理学科)  
在職期間 昭和四十七年から平成二十二年三月  
専門分野 原子核物理学

大西 耕二先生(生物学科)  
在職期間 昭和四十五年から平成二十二年三月  
専門分野 進化生物学

田澤 純一先生(地質科学科)  
在職期間 昭和六十一年から平成二十二年三月

専門分野 層位・古生物学

櫻田 昭次先生

(自然環境科学科)  
在職期間 昭和四十七年から平成二十二年三月  
専門分野 個体物性・X線結晶学

## 亡くなられた先生

三沢 正勝先生  
(元化学科・教授)  
平成二十二年八月三十日  
(享年六十六歳)

## 寄付金ご協力のお願い

同窓会は新入生(準会員)からの会費で運営されています。しかし、全学同窓会への賦課金・分担金、支部交付金、広報・会議費などで、会費だけでは運営できない状況になっております。理学部同窓会の設立時から、正会員の皆様から寄付のご協力をお願いして参りました。ご協力いただけるとは、事情ご賢察の上振替用紙でご寄付下さるようお願い致します。

一口 壹万円 (一口以上) 口座番号: 〇〇五二〇一五一 九五二一八

加入者名: 新潟大学理学部同窓会

## 正会員寄付金拠出者御芳名

平成21年12月1日～22年9月30日

日比 登史男

(1名 敬称略)

## 会報の届いて居ない方は連絡を

理学部同窓会誌「会報」が二十一年度末で一号から十号、および十八年度末に卒業記念号が発行されています。同窓生の皆様には、各支部からお届けすることになっておりますが、住所・姓の変更などによりまだお手元のない方はご連絡下さい。なお、HP上にて閲覧・取り出すことも可能です。

## 編集後記

今号は理学部の中でも一番の若輩である自然環境科学科支部が編集担当いたしました。が、事務局のご尽力の御陰で予定通りに発行できました。また、今回ご寄稿くださいました皆様、誠に有難うございました。

新潟大学理学部同窓会  
住所 千九五〇一八二一  
新潟市西区五十嵐二の町八〇五〇  
新潟大学理学部内  
TEL 〇二五二六二二六二一  
FAX 〇二五二六二二六一  
E-mail ridoso@adsci.nigata-u.ac.jp  
URL http://www.ridoso.jp/